

馬産地・浦河町と 競馬の物語

対談

馳 星周

(小説家)

河野 啓

(作家)

日本有数の馬産地として知られる北海道・浦河町では、馬の牧場で働くインド人が増えている。そんな浦河町の実情を丹念に取材し、『HHH』を上梓した河野氏と、出身地でもあり、競馬をテーマにした作品も多い馳氏が、浦河の地で語り合う。

生産牧場の人手不足によって
多国籍化が進む浦河町

河野 啓 (以下、河野) 馳さんは浦河生まれとお聞きしましたが、いつ頃までいらしたんですか？

馳 星周 (以下、馳) 浦河はもともと、僕の生まれ故郷なんです。といっても小学生の頃までしか住んでいなかったのですが、二〇一八年にテレビ番組の撮影で久しぶりに帰ってくる機会がありました。

七月後半のロケで、本州はどこもかしこも三九度しかなくて、すごく快適だったんです。本州に比べてこんなに涼しい地域だったのかと、ちょっと驚きました。そこで撮影を視察に来ていた町長に、ぼろっと「夏だけ浦河に住めたらいいな」と言ったら、すぐに住む家を探してくれて(笑)。

河野 それでトントン拍子に事が運んでしまった、と。

馳 そうなんです。うちは大型犬もいるし、夏場はもう少し涼しい環境で過ごさせてやったほうがいいだろうと思い、決めました。実際に浦河に拠点を構え始めたのは、二〇一九年からです。

河野 私は普段、札幌にいますので、浦河とは自著『HHH インド人、ジャパンの競馬をHeipします!』を書くまで、ほとんど接点がなかったんですよ。

馳 基本的に馬か漁業に関わっている人でなけ

れば、まず訪れる機会のない町ですから。

河野 二〇年以上前、北海道放送の報道部にいたころ、同僚は日高の牧場で起きた殺人事件や、本州から来たハンターが夜間放牧されている競走馬を鹿と間違えて撃って死なせてしまう事件取材していました。私自身は日高とまったく接点がありませんでした。最近になって友人から「浦河は今、馬の牧場で働くインド人がすごく増えているんだよ」と教えられて、興味を持ちました。

馳 確かにそうですね。というか、最近はいンド人以外にもいろんな国の人がいますよ。

河野 そうですね、私が最初に町で話をした外国人は南アフリカ共和国の人でした。ジンバブエの人とも親しくなりました。浦河の多国籍ぶりを実感しました。

馳 浦河の牧場の人に話を聞くと、昔は出稼ぎに来る人といえば、オーストラリア人やニュージーランド人が中心だったそうです。それから

時代が変わり、円が弱くなるに連れてフィリピンからの出稼ぎが増え、そして今はインド人が中心になりました。インドの人たちは働き者と聞きますから、牧場の側としてはありがたいのじゃないかな。

河野 私はもともと競馬に明るいわけではないので、馬産地の歴史をまったく知らないところから取材をスタートしたんです。でも、それがかえって良かったと感じていて、なぜ北海道日高地方が馬産地として繁栄したのか、『HHH』では日本の競馬の歩みに触れながら物語を展開させることができました。

馳 ちなみに、これは結構あちこちで言っていることなのですが、僕はもともとこの町があまり好きではなかったんですよ。

河野 それはなぜですか？

馳 当時はまだ農家が多くて、農耕馬が普通に道を歩いていて、至る所から馬糞のおいが漂っていましたからね。自ずと、馬がド田舎の象徴





浦河町の牧場、武田ステープルで働くセク・スルタンさん。インド東部の大都市コルカタ出身。



浦河町の牧場、辻牧場で働くイザール・ディーンさん。インド東部ビハール州出身。

日高地方が馬産地として 繁栄した理由とは

河野 そうした気候の変化もさることながら、私
がやっぱり気になるのは、この町で暮らす人々
の変化です。「外国人労働者」というのは非常に
今日的なテーマだと思いますが、浦河の人口が
今一万一〇〇〇人強で、そのうちの四〇〇人弱
をインド人が占めています。これはなかなかの
割合ですよ。

馳 そうですね。浦河に戻ってきてすぐの頃、こ
んな田舎のスーパリーなのに、やたら香辛料が充
実していて驚きました。

河野 インド人の食卓には欠かせないものです
からね。

馳 車の窓を開けて町を走っていると、どこか
らともなくカレーの匂いがしてくるので、「これ
が今の浦河なのか」と否が応でも実感させられ
ました。結局、根底にあるのは人手不足の問題
なんですよ。

河野 まさにそこが、私にとって今回のテーマ
でした。これまで騎手や調教師、馬主などを描
いた作品はあっても、競馬を舞台裏で支えてい
る異国のホースマンにスポットを当てたノン

みたいに思えてしまつて、「早くこんなところか
ら抜け出したい」と本気で思っていました。

河野 それはわからなくもないですね。

馳 それに、まだ今ほど温暖化していない頃だ
から、体育の授業でプールに入るのなんて、ほ
とんど拷問でした（笑）。みんな、ブルブルと震
えながら泳いでいたものです。

河野 私も北海道に住んで四〇年以上になりま
すけど、以前に比べると本当に暑くなりました
よね。今年は札幌もすごく暑かった。浦河の厩
舎でも、昨年までは午前四時半から動いていた
のを、酷暑対策で、夏場は一時間繰り上げて三
時半から稼働しているところがあります。

馳 そうでしょうね。僕の体感では、この二年
でまた、急激に暑くなったように思います。二
〇二三年以降は浦河でも三〇度を超えるよう
になりましたから。

河野 そういえば一昨年、浦河の牧場で熱中症
にかかった馬を初めて見て驚きました。

馳 馬の熱中症、競馬の世界では結構あるん
ですよ、特に夏場は。だからJRAも新潟や名古
屋など暑い地域では昼休みを設けたりしている
のですが、それもこの日中の暑さではあまり意
味がないですよ。馬はもともと暑さに弱い生
き物だから、ナイターにでもしないと根本的な
解決にはなりません。

フィクションはなかったと思うんです。もし私
が根っからの競馬ファンだったら、こういう視
点は持てなかったはずですよ。

馳 『ウマ娘』人気などもあって、競馬に興味を
持ったり牧場で働いてみたいと思つていたりす
る若者は増えていと思うのですが、実際に働
きだすと理想と現実のギャップに直面するわけ
ですよ。

河野 長続きしない、と。

馳 そう、とにかく大変ですからね。休みもあ
まりないし、夏も冬も関係なく早朝から稼働し
なければならぬし。ましてこのあたりは本当
に田舎なので、娯楽も少ないですから。若い人
たちにはなかなか厳しい環境だと思います。

河野 浦河は道内では温暖なほうですが、地面
が凍つて馬がスリップして転倒すると、調教す
る人間も巻き込まれます。馬の下敷きになつて
足を骨折したインド人がいて、私は札幌の病院
に見舞いに行きました。

馳 そんな土地柄でありながら、こうして馬産
地として栄えているのは、もともと日高地方に
御料牧場（皇室用の馬を飼育する牧場）が置か
れていたからです。当時の宮内省が北海道全域
を徹底的に調査した結果、平らな土地が多くて
雪が少ないのがこの地域だったわけです。

河野 なかでも浦河は軍馬の育成をやつていた
土地柄ですよ。日露戦争のあとに。そこが特
徴的だと思います。

馳 ところで今回の取材期間中は、ずっと札幌
から浦河まで通われていたんですか？

河野 いえ、最初は町中のホテルや旅館、ゲス
トハウスなどを泊まり歩いていました。ところ
が、取材対象のインド人は全然町の人たちと交
流しないんですよ。余計なお金を使いたくない
から、宿舎にインド人同士で集まつて、みんな
でカレーを食べている。異国の町を楽しむ彼ら
の姿を期待していたんですが、どこにもいない
んです。それならこちらも宿泊費を抑えたいの
で、途中からは町内のキャンプ場に泊まるよう
にしました。

馳 え、ずっとテントで寝泊まりしていたん
ですか？

河野 そうですよ（笑）。厩舎が多い地区から五キ
ロほど山間に、オロマップキャンプ場という
ころがあつて、すごく星が綺麗なんです。取材
で早朝三時、四時に厩舎に行くこともあつたの
で、むしろ便利でした。

馳 オロマップキャンプ場、よく知ってます。あ
そこ、熊は大丈夫なんですか？

河野 私が取材を開始した二〇二三年は、北海

道北部の町で釣り人が熊に襲われて亡くなる事
件が起きていて、ちょっと怖かったですね。オ
ロマップキャンプ場の入り口のすぐ横に「クマ
出没多発地帯」って看板が立ってるんです（笑）。
幸い何事もありませんでした。

馳 熊は賢いし臆病だから、よほどのことがな
ければ向こうから逃げてくれますけどね。それ
でも今、全国各地でこうして被害が拡大してい
るのは、結局人間のせいなのだと思います。

河野 観光客が餌をやったりするのも問題です
よね。

馳 猟師が減つて数が増えていて、山に縄張り
を持たない熊が街まで降りてきている。彼らは
基本的に、山中で木の実を食べたり、川を遡上
してきた鮭を食べたりするはずなのですが。

河野 私が取材した年は、鮭がまったく遡上し
ませんでした。そういうのも熊が山から降りて
くる原因になっていのでしょね。

馳 それもおそらく、温暖化で海水温が上がつ
てしまった影響でしょう。逆に、そのおかげで
最近はおオズワイガニが大量発生していて、浦
河の水産加工場では一杯一〇〇円で売られてい
たりしますよ。うちにも二〇杯も三〇杯もま
わってくるけど、夫婦二人ではとても食べきれ
ません（笑）。